歩いて発見。津の魅力

175

歴史散歩

江戸時代の久居大火

今からちょうど200年前の文政４(1821)年３月20日、俗に「久居焼け」といわれる久居の城下町大半を延焼する火事がありました。久居藩の歴史や逸話などを著した「伊勢久居藩史(藤影記)」にこのことが記されています。

それによると、火元とみられるのは万町(現在の久居万町)の民家で、この家は夫が江戸(現在の東京)に出ていて、留守を預かる妻と２人の子どもが暮らしていたそうです。妻が昼食準備のためかまどに火を付け、そのまま子どもを連れて隣家で立ち話をし、ご飯が炊き上がった頃かと家に帰りましたが台所は火の海になっていて、慌てて近所の人を呼びましたがすでに手が付けられない状態でした。しかもこの日は北西の風が強く、風は火をあおり、あっという間に隣家に移り、次々に延焼していきました。それを見た火元の家の妻は子どもを連れて、火事の混乱に乗じてどこかに逃亡し、行方知れずになったということです。

火事は、現在の久居西鷹跡町から風下になる久居東鷹跡町、久居幸町、久居旅籠町、久居本町へと延焼し、久居八幡宮や妙華寺本堂、玉淀(ぎょくせん)寺本堂なども焼失させました。５時間ほど燃え続けた大火は久居二ノ町でようやく火の手が止まりましたが、438戸もの家屋を焼失させたことが記録されています。火事の後、久居藩は炊き出しを行い、焼失民家一戸につき米二俵を援助、被災者に木材を与えるなど救済事業を行いました。

また、久居藩の菩提(ぼだい)所となる玉淀寺には、この火事に関する逸話が残されています。山門を入ると右手に２代藩主高堅と３代藩主高陳の墓所があり、その奥、境内の東側から北側の一部にかけてＬ字型の大変大きな池の跡が残っています。現在は木々に覆われ、池水もたたえていませんが、舟遊びもされるほど大きな池であったその当時、火事の中、突如竜が現れ境内にある池の水を飲んで降らせ、久居初代藩主高通、２代藩主高堅の木像を火の粉から守ったとされています。このような逸話を持つ、これらの木像は大切に保管され市指定有形文化財となり、現在も本堂に納められています。

現在、「久居焼け」といわれた大火の痕跡は残っていませんが、当時の人々の生活を脅かしたその教訓は、後世にも伝えていかなければなりません。

玉淀寺境内のかつての池の跡